

# 「私たちの学校」づくり軽井沢フォーラム 2025

## 第2部ワークショップ 記録

### ○基本情報

開催日：令和7年9月22日（月）

内 容：オープンドアスクール（仮称）並びに既存校の魅力化を図るため、第4回設置準備会議と合わせて開催。

前半、設置準備会議の委員等によるクロストークを行い、後半に参加者によるワークショップを実施。

方 法：参加者を8グループに分け、それぞれ町の職員や学校関係者がファシリテーターとなり、自由に意見交換や、前半のクロストークの感想共有をしていただいた。

まとめ方：各グループにて行われた意見交換の内容をグループごとに記載  
（各グループで話し合われた主な議題を各グループのタイトルとして抽出。）

### ○それぞれのグループでの意見

#### ●グループA

#### 1. 安全・安心で楽しく学ぶ学校はどうつくる？

- ・高校入試制度の改革。  
→高校入試制度が変わらない限り、どんな体験的学びやみんなで学び合うものも結局慣らされて、受験のための学びにされてしまう。何も変わらない。
- ・親の不安で教育のレールを敷かない。  
→親が、自分の子どもの選択に不安を抱き、レールを敷いてしまう。
- ・いろんな人を学校の中に入れて関わってもら。巻き込む。  
→親が何とかしなければいけないことと、学校がもっとどうにかしなければいけないこと、人との交わりの中で身につくものの3つが機能していないと、徐々に孤立してしまったり、教育現場が疲弊してしまったりする。  
そこに地域の人やいろいろな大人が関わることで、多様でいいということを受け取れるのではないか。  
いろいろなベクトルを持った大人を混ぜ、多様な考えでいいという認識を持てるようにすることがいいのではないか。
- ・子どもにあったカリキュラムを提供する。  
→現状、各教科の必要時間数を決めている。  
伊那小学校のような教育が望ましい。
- ・父兄が先生を育てる。  
→先生も人間だから、父兄のほうを知っていることがある。先生と親が生でディスカッションをして、環境を良くしていく。  
今の先生は委縮しているし、各家庭でやるべきしつけを学校にお願いしている。もっと親が大人になる必要がある。
- ・評価ありきじゃない学び
- ・まずは大人が楽しむ！
- ・否定的な「なんで」をなくし、ピュアな「なんで」を育てる。
- ・校内カフェをつくる。
- ・生死、法令違反以外のルールを子どもが作る。
- ・子どもが自分のことを決められる体制。
- ・座っていなくてもよい工夫。
- ・机の向き。
- ・学校図書館の充実。
- ・子ども同士、誰かのいいところ、いいことを文章などで渡し合う。

- ・軽井沢の自然を生かす。
- ・ひとり担任制の苦しみ、窮屈さ、先生と性格が合わないといきにくい。
- ・先生も子どもも間違ってもよい空気。
- ・先生の心理的安心、ゆとり、先生を助けてくれる空気。
- ・先生-生徒間の信頼、心の安全安心を確保する。
- ・親が先生に対して尊敬の念を持つ。
- ・子どもの主張に対し、ジャッジされないこと。
- 何を言っても一度受け入れてくれる場所。

## 2. 困る子どもを一人もつukらない学校とは？

- ・不登校児童生徒の親や夫婦関係に憎しみ、社会への恐怖を持っている子が多いように感じる。  
→家庭の環境が子どもを育てる。
- ・本人も困っているということに気づいていない時に声をかけてくれる場所。  
親が自分の子どもの困り感に気づいていないことが多い。  
→子どもも困っているし、親も困っていることが多い。  
子どもは困っていることに気づけないこともあるし、気づいていないから相談できないことがある。
- ・大人の存在感を薄くし、先生を頼りなくする。  
→先生の決定権を減らし、子どもが自己決定できる環境を整えることが必要。  
子どもは決める力がある。
- ・保護者が困っていることを相談できる体制をつくる。  
→親も孤独だし、先生も孤独。  
保護者と先生が連絡を密に取れると、子どもにとってのサポートが手厚くできるようになる。  
ここは親がやるべきという先生の考えと、学校にやってほしいという親の考えが伝え合えないと、関わりがうまくいかない。
- ・子どもが先生に相談しやすい環境づくり。  
→保健室や校長室が解放され、相談してくださいという張り紙等があるが、そこにいる先生と会わなければ結局相談ができない。  
相談しやすい先生や、外部の人がいるといいように感じる。例えば高校生などがいれば、高校生は話を聞くだけで、何をしろとか言ってこないから。
- ・ソーシャルスキルトレーニングをする。
- ・家庭の空気が子どもの成長に結果としてついてくる。
- ・先生側が困らなければよいだけ。先生側のマインドセットをどう持つかだけ。
- ・大人に相談できる空気。先生の立ち位置。
- ・困る子がいるのは当たり前。それをどうするかが大人の仕事。
- ・2人以上だと対人関係の問題が出てくる。「みんなで」をやめる。
- ・「多様である」が当たりの空気。
- ・親も巻き込む学校。
- ・大人フィルターをギリギリまでなくす努力。
- ・親が心を開くことが大事。

## ●グループB

### 1. クロストークの感想

- ・自分のことは自分で決めるという言葉が心に残った。  
10月6日から、カジュアル月間を実施予定。何を着てきてもいい月にする。  
ここから（やりやすいところから）「私たちの学校」づくりを始めようと思う。
- ・探究が保証されている、探究がしたいという思いで子どもたちが来る環境はどんな環境か考えていた。ある程度大人が持っている枠組みも大切だが、子どもが持っている枠組みを少しずつ広げてあげるという観点で、探究テーマだけ提案し、その中身は子どもが決めるというような関わりが大切であるのではないかと。  
先生にとっても子どもにとっても負担になりすぎないところがどこなのか。  
また、インクルーシブという言葉に違和感がある。今、障害がない人とある人がお互いを知らないすぎる現状があると感じる。そこに切り込んでいければと考えている。息を吸い続けたら酸素があっても息を吸えなくなる話があったが、そういう認識が共有される社会になればいいと思う。
- ・木村先生の話に、無理しないで行ける環境という話があったが、それは大人にとっても子どもにとってもそういう環境になればと思う。子どもが元気に笑顔で帰って来れる環境になれば嬉しい。
- ・子どもが学校に行けていない。子どもが自分を押し殺して無理に学校に行く必要もないと思うが、どうすればいけるようになるかを考えたときに、学校の環境や空気を変える必要があると思う。  
先生たちはこうあるべきというものがあり、親も同様にあり、そこががんじがらめになっているのではないと思う。  
学校へ行きたくない理由を自分で理解しているかどうかには差はあるが、理由も様々あると思う。一人ひとりが行きにくさを解消できる環境があれば、安心できる環境にできるのではないかと思っている。
- ・4名の登壇者の話をこれまでも聞いてきたが、常に軸がぶれていないと感じた。  
覚悟を決めて子どもと関わっているということが伝わってきた。

### 2. 居場所と学びの場がどうなっていけばいいか

- ・居場所もよいが、学びの場に変えていかなければいけないのではないかと考えてしまう。教育者が焦ってしまう。  
目の前の子が社会に出たときに使える力を身につけさせたいと考えたときに、学びの場としての役割も保証する必要があると考えてしまう。
- ・フリースクールなどもでき始めていて、「子どもがやりたくなるのを待つ」、「自由」という言葉が使われるが、自由という言葉に定義し直したほうがいい。  
やはり親として焦ってしまう。ただ居場所としていることも大切だが、成長していく過程の中にいるということを子どもたちが自分で認識して学んでいくということが必要であると考えてしまう。  
第一段階として、ここで受け入れられているという心理的安全性を確保する居場所があり、その先に学びたい意欲が生まれてくると考えており、その意欲を引き出すことは難しいが、子どもがやりたいと思ったときにそれを実現できる環境を整えておくことは必須であると思う。
- ・無理をしない環境とは？  
学校に行くと、得意不得意がある。みんなと同じ授業となると、個人の差を子どもの頑張りや埋めなければいけない。頑張れない子にとって無理しなければいけない環境になる。  
また、心落ち着ける空間がない。先生が子どもの居場所を知らなければいけない環境でもあるし、周りとは違う・隔離された環境になりたいわけでもない。  
親としては、安全安心に楽しい環境が理想。
- ・学校が安心できる場所じゃないと、子どもは心を開かない。  
どうすれば安心できるのかを考えると、自分の好きなことややりたいことができ、それを他の人も受け入れて、認めてくれる環境なことが必要だと思う。

同い年の子どもの中で様々な言葉が飛び交って、そこで成長していく面もあると思うが、そこにぶつかってしまう子どももいる。

子どもも大人も自分のやりたいことを言い合い、お互いやりたいことをやり、満足するという環境ができれば理想的。

- ・ 学びの場と居場所は、別物ではなく、区別できない、区別すべきでないものと考えている。学校も、今のイメージは勉強しなければいけないという面が強い子が多いが、給食を食べに行くところ、友達と会いに行く場所というように、勉強以外の面での存在価値がある子どももいる。

1人の子どもでも、ある時は居場所、ある時は学びの場になることもあるため、居場所と学びの場を役割の違うものと捉えること自体が意味のないもの。

学びの場というと、大人が願う学びを与える場という意味合いも強く感じるが、オープンドアスクールも子どもがどう受け取るかが大事なので、居場所や学びの場と分けて、受け取る子によって学びの場にも居場所にもなれるのが良い。

大人目線で、学びの場と居場所がどうあるべきかという愚論をするのは、本質を見えづらくしてしまうように感じる。

### 3. どうしたら、子どもたちにとって安心できる、心を開ける環境にできるか。

- ・ 子どもを区別しない、差別しない、レッテルを張らない。  
そういった先生たちの雰囲気というのが大切なのではないか。
- ・ 昔は学校に行くのが当たり前だったため、自分が学生の頃通っていたが、友人関係等により学校へ行くのがつらかった。  
教職員時代にも、業務量により抑うつ状態になった。ただその時に、周りにいる先生が、学校を休むことや時短勤務となることを受け入れてくれた。  
「よく来れた！」という空気をつくってくれていて、それに救われた。  
そのままで100%だし、みんなで+αを積み上げていこうということを言われたことで救われたので、そのままでいいし、そのままで愛情を注ぐという意識が環境を整えるのに大切だと思う。  
今のままでいいんだという愛情を注ぐ、自分を認められる環境が、経験が大切。
- ・ 自分の子どもが困りごとを抱えていた時に、クラスのサブ担任に相談したらいいんじゃないかという提案をしたところ、「あの先生は僕のことを嫌いだから」という発言があった。小学校低学年の子どもにそう感じさせるような環境は良くないと感じた。「女の子に対しての対応と僕への対応が違う」と言っていた。  
子どもが何かあったときに先生に助けを求められる、信じられる大人がいるという環境が安心していける環境じゃないかと思う。
- ・ 担任の先生だけではなく、だれか自分の話を聞いてくれるような、信頼できる大人がいる環境は本当に大切なことだと感じた。  
そういった大人が1人でもいれば、安心感が違うと思った。
- ・ 学校の中に相談できる場や、相談できる人がいるといいなと。  
1人が担任ということではなく、みんなが担任というような形にできればより良い環境にできるように感じた。様々なチャンネルを用意しておいて、この先生なら話せるというような環境の準備ができればと思っている。
- ・ スクールサポーターが学校へきて話を聞いてもらう時間をつくっているが、その頻度が非常に低い。2か月に1回、3か月に1回になっており、今年度に入りその頻度がさらに減った。  
もっと話を聞いてくれる環境の整備、サポートの人数が増えればいいなと思う。  
求めている子が多いので、順番が回ってこない。
- ・ 子どもたちは、とても賢い。大人との付き合い方で忖度をする。  
自分に何を望んでいるかを分かっているので、期待に沿うような反応を示す。  
しかしそれは本音ではない。  
本音が出たときに、なんで日頃行ってくれないのかと聞くと、言っても大人は聞いてくれないし、何もしてくれないと返ってくることがある。

目の前の子が本音かどうかを見極める力が先生に必要。

また、先生も立場的に本音が出せない現状がある。教師も1人の人間としてではなく、教師という役割の中で接している。

しかし子どもが求めていることがそういうことではないことも多い。

自分の評価をする人ではなく、素の自分を受け止めてくれるという雰囲気をつくるのが、子どもにとっての安心な環境であると考え。

- ・日本人の癖として、大人と子どもは対等じゃない、大人が上であるという考え方があると思う。家庭でも学校でもそれは同様に感じる。

しかし、北欧では、子どもも社会の一員として捉えている。

その意識はとても大きな違いだし、子どもの安心のために必要であると思う。

「大人の権威」といわれることも多いが、子どもの持っている枠は小さく、経験値が足りないということもあるので、大人が持っている経験値を持って、少しずつ子どもの枠を広げていくというきっかけを与える役割があるということを教員側が自覚する必要があると思う。

- ・発達心理学を学んでいない大人、教員が多すぎると感じる。

これを学ぶことで、もっと教育課程・教員養成課程が変わると感じる。

今の教員は、教員として完璧でなければいけないという風潮がいまだにあり、教員が受け止め切れていないという現状があるように感じる。

- ・オープンドアスクールですら選択肢にならない子どももいるかもしれないという前提でいることが必要である。

## ●グループC

### 1. クロストークの感想（ありのままで学校に行けていたか。）

- ・中学に入った途端、軍隊感が強くつらい様子が見られる。  
制服を着なければいけない等。  
また、学校を休むと甘えているととらえられたこともあり、親子関係にも影響が出たことがあった。  
親子ともども追い詰められたり、孤独になったりすることもある。  
これだけ不登校が増えている中で、不登校は子どものせいだという考え方を大人から変えていく必要があると感じた。
- ・学校で困っているときに、困っていると言にくい。  
本当は困っているが、それを出すことができないと感じている子が多い。
- ・本当は学校に行きたいが、勉強が分からないときに「分からない。」「困っている。」と言えないことで勉強についていけず、学校に行けなくなってしまう子どもがいる。
- ・勉強も困っているが、困り感を伝えられないため、「つまらない」という表現しか表出してこない。  
→先生もつまらないとしかわからないから、どうしたらいい対応ができるのかわからず、困っているように感じる。

### 2. 一人ひとりが自分で考えて解決するという話があったが、それをできる環境が学校にあるか。

- ・学校の当たり前を見直そうという大きなことを長野県がやろうとしている。  
それぞれの学校がやっている当たり前を考え直してほしいという声を聞かせてもらえるとうい。  
それぞれが受けてきた教育観というものもあるため、当たり前を見直す意識が浸透するまでにはとても時間がかかるものだと思う。
- ・当たり前とは何か。  
多数派が当たり前となりがちだが、それが子どもにとって苦しい。  
→本来、当たり前というものはないのではないか。  
大人のこれまでの当たり前が子どもを苦しめているように感じる。  
軽井沢中学校にも、掃除のときに手ぬぐいを被る、無言清掃という校則があるが、だれのための、何のための校則なのかわからないような、そういったものも多い。  
→大人も、なんでそういった校則があるのか、理由や由来を知らずに、これまでそうだったからという理由で取り組んでいることがある。  
→子どもも、理由や由来に納得すれば、自然と取り組むようになる。
- ・現状の学校は、自分で考えてやることができないし、考えてもそのとおりにできないことが多い。図工の授業なども、なんでみんな同じものをつくらなければいけないのかという子どもの声がある。
- ・子どもの主体性が注目を集めているが、大人の主体性も必要と感じる。  
子どもだけが主体的で、それに対して大人が我慢するのではなく、話し合えるような環境があれば、それが一番いいと思う。
- ・授業時間ややるべきことも決まっている、枠がガチガチになっている現状は、子どもにとってはつまらないだろうと思う。
- ・何もなくていい、何もしないということが選択肢にあってもいいと思う。  
学校は何かしなければいけないという考えもあるし、こういったワークショップでは発言しなければいけないという意識も持ってしまう。  
しかし、実際には何もしないことを選択してもよい。
- ・学校の文化祭なども、コロナのときはオンライン配信等があり、学校に行けない子どもも雰囲気を楽しめる環境があったが、コロナ後そういったものもなくなり、学校に行かなければ雰囲気も知ることができないような、選択肢が狭い形に戻ってしまった。

### 3. どんな学校だったらいいですか。

- ・娘が言っているのは「みんなで同じ方向を向いて、一斉に授業を受けるのは退屈。自分のペースで学習したい。自分で決めて、興味あることを探究したい。」  
ただ、みんながみんなやりたいことが決まっていて、自分のやりたいことを自分で進めていけるわけではない。  
その差をどのように扱うかが難しいように感じる。  
ただ、そういった選択肢もあるといいように思う。
- ・クラス担任が1人では、そういった環境づくりは難しいように感じる。  
授業を進めていく人と、拾ったり共感したり、フォローする人がそれぞれいれば…。1人で30人以上を細かく見ることはできない。  
チームで支援できる体制があればいい。
- ・子どもの気持ちに寄り添える大人がいればよい。  
単純な+1人ではなく、一緒に作っていく大人がいれば。

### 4. アンケート結果から（自分のペースで学べるには）

- ・学校によって、柔軟な体制を組んでいる、個別最適化の学習に取り組んでいるところもある。学年担任制をとっている学校もある。  
しかし、当たり前の話が合ったように、一斉授業をしてきたというこれまでの当たり前があるため、個別最適化の授業への変化が進んでいない。
- ・学校の現状としては、個人のペースで学べていない。
- ・子どもの学年が上がり、担任が変わったことで学校へ行けるようになった。  
先生の教え方がうまいから楽しいと。  
その先生は、授業の中で遊びの要素も織り交ぜていた。  
もっと勉強を教える手法が増えたら、それぞれの子に合った授業方法が取れるようになるのではないか。
- ・座っているだけではなく、体験や体を使った授業も、地域の人との協力を得ながらやることであれば、先生の負担も軽減しつつ、学べるのではないか。
- ・1つの科目をただ学ぶのではなく、総合的な学習として、いろいろな学習要素が混ざった活動が楽しいという子どもも多い。  
→ただ授業をする、学力を身に着けるための学習ではなく、暮らしに根付いた学習をすることで、楽しさや学ぶ意欲を引き出すことができる。

### 5. 困っている子をつくらないためには

- ・何もしない自由、何もしないことを選べる環境が大切。
- ・どの気持ちも大切にすることが大切。  
日本人は、他人に対してよく見せなければいけないという意識があり、外で「だるい」「つまんない」等言いにくい。  
ただ、その気持ちも大切な気持ちであって、子どもも大人も持っている。  
その気持ちにふたをするのではなく、どの感情を出してもいい、言っている環境づくりを意識している。  
そうすると、安心して出てくる。
- ・大人が見守る、待てる環境があれば、子どもも自分の考えをまとめたり、自分のタイミングで動いたりすることができる。  
大人が待つ勇気を持つことが必要。
- ・教室の中で、意見を言う子は考えている、授業を聞いている子だけど、意見を言わない子はさぼっていると思われることがある。  
でも、実際は全員が考えている。自分のタイミングを計っているだけなんだけど、子どもを信頼して待つことができない大人が多い。
- ・学校現場でも、自由に歩いている子どもがいて、その子を見守ろうと考えていたところ、学年主任から注意するようにとの指導があった。

学校現場、教員間にも、同調圧力などがあり、待つことができなくなっている。  
待とうとすると、ちゃんと指導していないと思われてしまう。そう思われたくないから、待つのではなく関わりに行くしかなくなる。

- ・「ちゃんと」ことを求めようとする人が多い。  
「ちゃんと」とはなにか。子どもも大人も「ちゃんとする」必要はない。
- ・本当に困ったときに、その子話を聞いてあげられる、困ったといえる大人がいれば困った子をつくらなくて済むのではないか。  
→どんな大人なら相談できるか。  
頭ごなしに怒らない。意見やアドバイスを押し付けない。  
自分の気持ちを聞いてくれる。じっくり話を聞いてくれる。  
ただ一緒にいてくれる。子どもの発言を待ってくれる。

## 6. オープンドアスクール（仮称）や今後の既存校に対しての意見

- ・オープンドアスクール（仮称）は1学年10人程度と狭き門のため、ぜひ既存校の魅力化を推進してほしい。  
軽井沢中学校の制服について、昨年デザインチェンジや私服の取り組み等の話もあり、保護者アンケートにて保護者は要望を書いた。しかし、教頭が異動したことで白紙になってしまった。  
オープンドアスクール（仮称）をつくるのが最優先になってしまっていて、既存校に通う子どもたちの環境は後回しになっているのではないかと感じる。  
子どもは選択制の服装を希望しているが、中学校からは、「高速道路で制限速度をなくすのと同じようなもので、そうなったらどうなってしまうと思いますか」という話をされた。
  - ・ただ新しいのをつくるだけではなく、既存校をよくする、既存校に通っている子どもを大切にしてほしい。
-



## ●グループD

### 1. クロストークの感想

- ・4名の話はどれもその通りだと感じたが、実際の学校でそういったことをやったり、そういう空気を作ったりしていくためにあるハードルは、先生たちが苦しんでいて、やりたいけどできないでいるという現状にあると思う。  
先生を解きほぐすことも必要である。  
今、佐久の城山小学校でやっている「わたしの時間」というものがある。  
これは、授業時間を40分にして、作り出した20分間で各自が好きなことを個別に探究する時間。  
授業の新たな活動をする中で、先生が一番変わってきた。子どもを信じて、声をかけずに待つということなど。  
→管理職も、ただ新たなものを導入するだけではなく、そういったものに先生が取り組めるような空気づくりや職員室の雰囲気的大事。
- ・「わたしの時間」は、評価しない時間としているという話を聞いた。  
評価しないことで待てる先生が増えた。  
通知表の有無等も、先生が余裕を持てない原因になっているように思う。  
→風越学園は、小学校まで通知表がない。  
ただ、高校受験に必要なので、中学校からは通知表がある。
- ・保護者も、通知表という目に見える評価を必要としている。  
先生に対するサポートも必要だが、保護者のサポートも必要。先生が自由になるには保護者が自由になる必要がある。
- ・伊那小学校は実際に通知表がない。  
しかし、中学校に上がるときにその子どもの様子や得意不得意を共有する必要がある。もともと評価に正解はないが、子どもの評価という部分で担任の負担は大きくなるのではないか。  
数値的な指標の良さと、自由評価のそれぞれの良さがあるように感じる。  
→評価の基準や正解はだれが持っているのか。  
それぞれの先生ごとにみる点や感じ方は違うため、あてにならない。
- ・風越学園は、色々な先生が見ていて、グループワークなどでの一面を見ていたりしてくれる。一人の先生がそこまで見ることはとても難しい。  
そもそも、担任制が必要なのか
- ・伊那小学校は特別だが、高校受験があるために中学校はほかの地域と変わらない学校になっている。  
だからこそ、中学に上がったときに戸惑いを感じて来られなくなる子もいる。  
→先生によっても当たりはずれがある。適応する力まで教えることができると、その後も適応できるが、子どもをただ自由にさせているクラスだと、対話は多いが、クラス替えなど環境が変わったときに対応することが難しい。  
→軽井沢でも「私たちの学校」と言っているが、これが「私の学校」となってしまうと、どうしても自分の考えが最優先になってしまう。
- ・望月小学校は、通知表がなく、子どもが自分で自分のことを評価する。  
◎、○、△で自分の評価をつける制度。  
学力については、テストの評価だけを先生がやっている。単元の結果だけをフィードバックするので、先生の主観が入っていない。
- ・城山小学校の「わたしの時間」は、校長先生が赴任してすぐやりたいといったが、ベテランの先生から猛反発があった。  
そんなことをやったら子どもたちがぐちゃぐちゃになると。  
焦ってやるのではなく、話し合って1年後に始められることを目指そうということで意見交換をした。保護者への説明会も何度も行った。  
通知表等への記入はなく、保護者面談の中で話したりはするが、その20分の活動のために自宅で準備したりする子もいるため、家で話している様子。  
→「わたしの時間」を始めたことで、先生たちの雰囲気が変わった。

- 評価しなくなったために、待つことができる、いいこと探しできるようになった。
- 先生は子どもたちを育てなければいけない、評価しなければいけないということがあるため、子どものことを待てないというジレンマがあるように感じる。
- ・望月小学校や浅間小学校も、城山小学校を真似して、子どもたちの自由探究の時間をつくっている。
- ただ、望月小学校での活動は子どもたちにとって「休み時間が少し増えた」というような感覚になってしまっている。
- 城山小学校では、最初の反対意見に「休み時間の延長になってしまうのではないか」というものがあつたため、最初の頃はひとり探究とした。今は、その探究の延長線として、人との関わりも出始めている。
  - ・大人は、何かをしたときに目に見える成果を必要としている。

大人が長い時間軸で見ることが必要であると思う。

→荒井座長が言っていたが、今不満がなくても未来に不安があるのが大人だという話があつた。

目の前の子どもをちゃんと見るという目が養われれば、子どものためにできることが増えるのではないかな。

→目の前の子どもを信頼するには、自分を信頼することが必要。

まずは大人が自分自身を信頼することが大切。

  - ・木村先生の話で、「先生の指導が一瞬で暴力になる」というものがあつた。

先生が言わなくても、こんな姿がいいというものがあると、その姿を目指してしまう。

→アンケートの中でも、みんなの前で怒らないということがあつたが、怒られている子どもを見ると、みんなが「この子は困る子だ」という認識になってしまう。

→大人の伝え方を変える必要がある。

「あなたが悪い」ではなく、「あなたの行動が悪い」という言い方にするだけで子どもが感じることも違う。

  - ・第3回会議でも、みんなの前で怒ることは、大人がやればパワハラという話があつたが、大人に置き換えるとおかしいことが多い。

宿題も強制残業だし、給食の時間も短すぎるのではないかと。

→佐久市で、宿題をやめようとした学校があつたが、保護者や一部の子どもが宿題を希望した。

子どもがどこの勉強をすればいいのかわからなくなるので、宿題という形でやるべき範囲を決めてほしいと。

結果的には、宿題を選べる形となった。

  - ・不登校が非常に増えている中で、受け皿が少なすぎるように感じる。
  - ・合う合わないがあるから、公立学校にも「きっちり」「だらだら」「ゆるゆる」というような学校ごとの特色があつてもいいように感じる。
  - ・放任と自由を認めるというのは全く別物であるように感じる。

評価をしないけど、子どもの変化を見ていられるという環境が子どもにとっていいように思う。

  - ・様々な話を教員同士でやってほしいが、先生たちが忙しすぎて、そんな話をする時間をつくれないといわれてしまう。

→この言葉の中に、どんな痛みがあるのかを知る必要があると思う。

やりたい先生はいると思うが、この「できない」という判断の中に様々な痛みや葛藤があるように感じる。

→城山小学校は、「わたしの時間」を導入したことで、授業時間が短縮となり、授業づくりは難しくなったが、帰る時間は早くなったと教員は言っている。

## ●グループE

### 1. クロストークの感想

- ・やらなきゃいけないことが多い。やりたいことがやりたいときにできなかったり、許可が必要だったりする。とても苦しそう。
- ・子どもが高校説明会へ行ったときに、ピンとこないと言っていた。  
説明会にいる学校関係者がみんなおじさんで、スーツを着ていて…ということに違和感と言っていた。  
クロストークで空気が吸えないという話があったが、子どもが言っていた違和感というのがそういったところから感じる場所だったのではないかと感じた。  
また、制服だから行かないという話もしており、それを変えればいいのではないかと提案すると、このルールがあるということはルールをつくった際には制服のほうが良いという判断をしている人が大半であった上に、その後見直しもされていないということは、制服を決められた時期以外は着るべきという感覚の人が多いといわれた。  
今の学校に違和感がないのか、今の子どもに聞いてみたい。
- ・違和感を覚える子どもは多い。  
こういった議論は、短期的な取り組みと、中・長期的な取り組みで分ける必要がある。  
例えば、空気を吸える学校が将来できるとして、それはいつになるのか。それができるまでに、今の子どもたちの環境を整えることはどうするのかと。  
フリースクールが県内にたくさんあるのは、そこに必死な、緊急事態が起こっているからだと思う。  
いい学校ができるという議論をじっくりすることも大切だが、明日学校に行けなくて命の危険を感じている子どもをどのように救うかということも考えなければいけないと思っている。  
また、大人がこうしよう、こんな学習、こんな場にしようとするのではなく、子どもが何をしたい、どんな空間にしたいという意見を聞いて場づくりをしていくのがいいと思う。短期的には、こういった子どもの意見を聞きながら、その場づくりをしていくというものがもっともよいのではないかと考えている。  
その際に出た意見やシステムを踏まえて、中・長期的なものに反映していくのがいいと考える。
- ・今苦しんでいる子どもを救うという話のときに、「みんなが」という主語が出てくる。この大きな主語に対して、本当に実現できるのかという疑問がある。  
みんなという全体像を見て進めていくのが行政、実際に目の前の子どものために動くのが現場であると思う。  
現場と行政が密になり、同じ方向を見ていかなければ、いいものにはならず、やっただけ、名前だけ、形だけになってしまうのだろうと思う。
- ・わがままとやりたいをどのようにすみ分けていくか、難しさを感じている。  
意見を聞くのも大事だが、聞いた大人が何をすることが大切だと思う。  
中途半端に聞くだけではだめで、時には現実を教えていくことも大切なのではないかなと思う。
- ・時間があれば、納得いくまでやらせたいが、授業では45分、50分という枠が決まっているので、授業が終われば「探究をやめて」という形になってしまう。  
ただ、学校という環境の中で授業時間を決めないのも難しい。秩序も必要ではあると思う。  
→自然は、秩序の上にあるが、不確かで、シーズンごとに見せる顔が変わる。  
自然はなぜ秩序があるのに、あそこまで自由に、それぞれがそれぞれでいられるのかというところが疑問で、秩序を持ちつつ自由度を上げるという設問の答えがあるように感じている。
- ・何を探究するかという壁に当たったとき、大人はそのテーマを与えてしまっている。しかし、子どもたちは対話の中で様々な疑問を持っている。  
そういった疑問から探究のテーマを決め、進めていくということも大切。  
問いかけの在り方というものを考え直し、対話が最初にあったほうがいいのではないかなと思う。

- う。
- 学校は探究をやめれば良いと思っている。  
多様性といってみんながやりたいことがあり、価値観や好きなことなど重なるものが少なくなっている。  
昔は、みんながやっているスポーツ、趣味、テレビ番組、時間の使い方などがあまり違いがなく、共通の話題がたくさんあった。  
しかし、今は共通の話題が少ない。  
音楽も、テレビ番組も、趣味も。共通するものが減っている。  
学習も、営業が大事、マナー教育が大事、情報教育が大事とか、大人によって大切に感じるものが異なっている。  
子どもたちは、自分の興味があるものを授業でやりたいのかというと、そうではないのではない場合もある。  
学校ができることが限られてきているように感じる。  
学校が得意としていることは学校がやり、それ以外は外部で得意としているところが担当すればいいのではないか。  
無理に学校がやろうとするから、ダブルスタンダードのように、自由なようで自由じゃないものになってしまう。
  - 軽井沢ゼミという町内小学生向け授業を行った際に、こちらが感じてほしいと思っていた趣旨を理解して、子どもたちがそれに合わせて学んでいる姿があった。  
これだけ大人の意思をくんでしまう子どもに探究をさせるのは、とても難しい、大変だということを感じた。
  - ドックランのように、子どもたちに自由に走れと言っても、走れといった側の意図をくんで、上手に走っているのが現状。  
しかし、本当の探究とはそういうものではないのではないか。  
現状のものは、探究的な学習なだけではないのかと疑問に感じる。  
探究自体、学校に押し付けるのが間違えているように感じている。
  - 探究に力を入れている伊那小学校にいたが、チャイムもなく探究を続けていくという授業形態だが、とにかく話し合って探究の内容を決めている。  
大変なのは教職員。こんな探究にすればこういった学びにつなげるという見通しを持ちながら授業をつくる必要がある。
  - 教えなければいけない教科が多いから、探究を嫌がる教員が多い。  
教えなければいけないことや、見通しを持って対応しなければいけないことが増えるから。  
教員の意識をどのように変えていくかも大切。
  - 学校はそもそも、ファミレスのようにまんべんなく様々なことを学べる場所としてあったのではないかと考えているが、そこで、専門店に負けられないようなラーメンやカレーを提供しろと言われている状態。  
専門店の知識もなく、ファミレスで働くための知識を勉強してきた教員に専門店の味を求めるのは無理ではないか。  
であれば、専門的な味は専門店、学校はまんべんなく選べる状態であるべきかと思う。  
その割り当てや、役割を決めるのは、行政や社会の役割だと思う。  
理想の教育と、理想の学校教育は別物。  
→ただ、その意識は各家庭や保護者ごとに差がある。  
高校入試を考えたり、その後の進路を考えたりする際に、もっとこういうものが必要というような要求になっているように感じる。  
保護者の不安とどのように向き合うかも課題。
  - P T Aの役員をしても、学校へ関わりたくない保護者が増えている。  
学校運営上最低限必要なことをP T Aが担っているが、それすら関わりたくない保護者が多い。  
親も生活をするために必死に生きている状態。  
→何もできないけど、地域の子どものために何かしたいと思ったときに、関わられるような土

壤ができていることは大切なように感じる。

- ・学ぶことは本来楽しいもので、知らなかったことを知れる、できなかったことができるようになることは楽しいことで、だからもっと学びたくなる。  
だけど、いつしか点数で評価されるようになり、先生や親から勉強しなさいしなさいと言われるから、面白くないものになってしまっている。  
学びとは楽しいものだということを、もっと考え直す必要がある。
- ・鳥取県立まなびの森学園という夜間中学は自分で最初学年を決めることができ、学ぶことを選べる。様々な年齢の方が一緒に学んでいた。  
1人の人が、修学旅行を企画し、先生を引率するんだという話をしていて。  
自分で決め、実行する力を身に着けたり、コミュニケーションを学んだりしていた。  
オーブンドアスクール（仮称）にも夜間中学が併設されるとみて、どんな環境になるのか気になっている。  
学ぶ場でもあるが、帰る場所であったりする。居場所であったり。

## 2. アンケート結果への感想や考え

- ・受け身の授業やテスト、みんなと同じことをしなければいけない空気が嫌だという意見が見受けられるが、先ほど話にも出た、学ぶことがつまらなくなっている原因の1つは「評価」だと考えている。  
書初めなども、みんな同じ字を同じ紙に書いている。しかし、書道は芸術的な面もあるため、好きな字を好きな字体で、好きな紙に書いていいのではないかなと思う。評価から見るとしにくいものになるため、お手本に近いかなという基準を設けることになるのではないかな。  
結局学びを自由なもの、個別最適なものにすると評価しにくくなる。評価しようとする、枠組みを設けなければいけなくなる。  
学校で探究をすると、それも評価の枠の中に入ってしまう。すると自由ではなく、評価システムに合わせてやることになってしまう。  
面白かったものを学校でやろうとするとつまらないものになってしまう。学校は手を広げないほうがいいのかと考えている。
- ・もともと人は、他人の評価軸に乗っかることに対する抵抗が大きい。  
自分ができたかどうかを自分で評価することはあっても、他者の評価軸によってどっちがすごい、えらいかということの評価されるのは、抵抗感の強いものであると考えていて、それは大人も子どもも同様であると思っている。苦しんでいる。  
そういったところでの苦しさをどのように取っていくかということが大切で、そこにアプローチできれば、世の中が優しくなるのではないかなと思う。  
そういう場所が快適な場所で、居場所になるのではないかな。  
→文部科学省は、フリースクールも評価を導入するという話を始めている。  
しかし、フリースクールの過ごし方に成績を付けないでほしいと思う。  
結果的に、フリースクールにも来られなくなってしまうのではないかなと思う。  
→学校からフリースクールへの転籍を行えるようにしようという目的でそういった話が出ている。転籍まで想定すると、フリースクールへも縛りが必要になってしまう。成果なども。
- ・スクールカウンセラーも成果を求められることがあり、学校に戻すことを目的として設置しているわけではないのに、学校に戻す成果がないと予算を付けないという話もある。  
カウンセラーの成果というのは、実際難しい。
- ・制度があったとしても、その制度の抜け目や、その制度の中でどのように柔軟に物事を行えるかということを考えていく必要がある。
- ・オーブンドアスクール（仮称）についても、どのように評価していくのかというのは難しいのではないかな。  
通常の学校の6～7割のカリキュラム量に変更ができるとして、通常の学校と比べてどのように満点を割り当ててるのか。  
通常の学校の評価を満点として、オーブンドアスクール（仮称）はその5割程度が満点の扱

いとして、高校入試に同じ評価レベルとして使えるようにするのかという問題もある。  
大日向小学校、大日向中学校も当初評価をしていなかったが、高校入試のために中学校では評価することとなった。

- ・高校で考えると、一斉授業をしてくれという子どももいる。  
一斉授業で、基礎を固めているおかげで高校の授業が楽しくなる場合もある。  
いろいろな生徒がいるので、こういう時に話題に上がるのは今の制度が苦手な生徒の意見ばかりになりがちだが、今のシステムが好きな子どももいるということを考慮することも必要。
  - ・評価も、ただ悪いものではなく、使い方次第ではやる気付け、動機付けになることもあると思う。  
評価の基準を事前に決め、事前に提示してしまうのは、その子どもの選択肢を狭めることになるが、目の前の子の興味や現状に応じた評価基準を設け、これができるのもっといいみたいな評価にすると評価に納得し、やる気を出す子がいる。  
なので、今の評価制度が良くない評価になっているのは、評価する側の技術不足なのではないかと思う。
  - ・多くの親や子ども、教員にアンケート行くと、この3者の過半数が一致して力を入れたいと言っていたのは「基礎・基本」という内容だけだった。  
やはり、子どもの意見をちゃんと聞くことが大切。グループ学習等がいいという意見もあるが、グループ学習だと声が大きい、意見が言える子どもの意見ばかりになってしまう。成績も、その目立った子に持っていかれてしまう。  
結果的に能力の評価になってしまう。主体的に学んでいる人は、別に発言している人だけではない。  
だから、グループ学習だけではなく、それ以外がいいという声も大切にしたい。
-

## ●グループF

### 1. クロストークの感想や意見等

- ・「どうして、学校に行けないだけで死ななければならないのか」という西野さんの発言が心に刺さっている。  
大人たちが作ったルールで、子どもたちが窮屈になっている。  
子どもたちにルールを作ってもらった方がいいのではないかなと思う。
- ・自宅で小規模な英語教室をしている。そこでは、自分なりの学び方を探してほしいと思い、みんなで同じ教科書の同じページを学ぶ形式ではなく、自由な学びの場としている。しかし、カオスになってしまう。  
1人ひとりのペースで学んでほしいという気持ちもあるが、現場がカオスになってしまうのではないかなという懸念がある。  
そのカオスをどのようにしていくのかという問い、疑問がある。
- ・夢パークやS a S a L A N Dも見させていただいているが、今日感じたのは、大切なのは息を吐くことだったんだということ。  
大人も息を吐かなければ、子どもに当たったり、子どもの居場所をなくしたりしてしまう。
- ・おおぞら小学校を以前から知っているが、なぜあんなにいい学校があるのにほかの学校が真似しないのかが不思議。
- ・「無理しないで行ける学校」という話があったが、学校へ行けない子どもが無理しないで行ける学校はどんなところか考えたい。
- ・本当は、学校が子どもにとっての居場所だと思っている。  
人間は他者との関わりの中で成長すると考えたときに、学校が最も子どもにとっての居場所になるように感じている。  
不登校が悪いことではないが、子どもが学校に行けなくなると、子どもは家以外に行ける場所がほぼなくなってしまう。  
放課後に遊ぼうと思っても習い事などがあってもかなわない。  
不登校になると、子どもは一人である、孤独の中になるようになる。これは問題だと思っており、だれにも遊んでももらえない自分はダメな人なんじゃないかという思考も出てくる。  
これを解消しようとする、やはり昼間の学校へ行ける環境が大切になる。
- ・自分が教員になったときに感じたのは、小学校1、2年生にとって45分集中して座って授業を受けるということは難しいことなのに、なぜそれをやらせているのかということだった。  
中学生は無言清掃や全員合唱というものがあつた。  
教員になった最初は、こういったところに疑問を抱いていたが、教員になって10年ほど経ち、今はそういったものもいいもののように感じている。  
先ほど西野さんも言っていたが、やはり高校入試がネックになっている。  
中学校で面白い授業も企画できるが、高校入試を考えると、点数を取らせるための学習をしなければいけなくなる。  
高校受験がなくなれば…と思っている。
- ・地域に、子どものことを考えて活動している人や、学校のサポートも現状ある。  
しかし、高校になった途端にそういったサポートが急になくなる。  
就職するときに、行政の方にきついことを言われることもあつた。  
子どもは幸せであるべきという考え方をしているが、高校に行った際に「先生とはいたくない」「知らない人になら相談できる」というような声があつたり、子どもが寄ってきたりする。本来はそういった話を聞くのが先生であってほしいとも思うが、先生も余裕があつたり幸せでなければ難しいとも感じている。  
中学以降のサポートやオープンドアスクール（仮称）の先のサポートまで充実すればいいなと感じた。

### 2. 先進事例を取り入れることと高校受験の見直しについて

- ・フィンランドでは、子どもたちを45分座らせておくのが毒だということで、床が良い人は床、ヨギボーがいいならヨギボーなど、自分の学ぶ環境を選べる。

そういったいい事例があるのに、日本人はオリジナルの事例をつくりたがると感じている。もっとお互いのいいところやアイデアをシェアし合えるような、真似し合えるような環境になればよりよくなるのではないかと思う。

- ・大人が意識の変化をできなくて、フィンランドの座る体制が自由なもの「だらしない」と取り入れられない。  
また、自分の評価を気にして、先にストップをかけている。
- ・今の教育は、基本先生主体になっている。  
生徒をきちんと座らせていることで私が良く評価をされるというように。  
子どもが学ぶことが主体ではなく、先生がいかに評価される環境にできるかが主語になっている。
- ・今の先生は、この件で子どもがダメになったらどうするかということばかり考えている。
- ・みんなで足並みをそろえるという教育を受けてきているから、新しいアイデアや新しい考え方をすることが難しいと考えている。
- ・大阪にある心和中学校は、I K E Aと協力して、I K E Aの家具等を導入している。  
→こういったいいものがある、知っているが導入しない場合も多い。  
また、その新しいものを導入する道筋を示す人が必要。  
部活動の地域移行を軽井沢町も行っているが、地域移行して教員の業務は減ったかという  
と、そこまで大きな変化はないように感じる。  
新しいものを入れるときに、今までのものも新しいものも覚えなければいけない状況にな  
っていて、さらに先生等の負担が増えている。
- ・大人の人数がしっかり確保される必要があると思う。  
金銭的な面もあるとは思いますが…。  
→金銭的な問題などもあるが、地域の人とのつながりという意味でもボランティアなどを活  
用してもいいのではないか。
- ・海外の事例をまねしない1つの理由として、外国ではうまくいっているが、日本で同じよう  
にやってもうまくいく保証がないというのもあると思う。  
結局、誰かがファーストペンギンとして実施して、そこでの課題などを改善していく必要が  
ある。  
→日本でうまくいくかわからないが、それも含めて許されるような、そういった先進的な取  
り組みをする学校があってもいいのかもしれない。
- ・大日向小学校というものができたが、現地の声を聞いていると、自由が子どもに浸透してい  
かないという話がある。  
幼稚園の頃から決まった枠の中に入る教育をされているため、小学校になって急に自由とい  
われ、自由をはき違えた行動が出てしまっている。  
また、保護者も教育熱心な方が多いため、保護者が介入してしまっている。  
なので、自由だから必ずしもうまくいっているわけではない。
- ・講演会に行き、質疑応答の時間を設けた際、参加生徒のほぼ全員が手を上げた学校があっ  
た。そこは、自分の考えを発言、発信できる教育を行っているし、講演会後に、当てられな  
かったからと質問に訪ねてきていた。
- ・F C今治高校も、自分の学ぶことを自分で決められる環境があり、英語の授業では同じクラ  
スの中に、リーディング、ライティング、スピーキングをやっている人が混在している。  
それは、だれにグループを組めと言われるわけでもなく、それぞれがやり方を考えて行っ  
ている。  
その他にも、子どもがやりたいといったことを実際にやってみる大人がいるため、やりたい  
ことや自分の考えを話すことができる環境ができています。
- ・高校受験に対する不安はあるが、受け皿がある。  
ただ受け入れにも条件があるため、それに引かからないとダメ。  
→私立でも、単位制でも、通信でも、条件がクリアできない子どもは行ける場所がないの  
が現状。  
また、中学に行けていない場合に中学校の評定がついていない。本人が頑張ってきたこと



に対しての評価はあるが、5段階評価の評定がないためネックになってくる。

→こういった話をぜひまとめて、意見として反映させてもらえる環境が欲しい。ただ意見を聞いて終わりではなく、きちんと反映させてもらえる環境があればよい。

ぜひ、オープンドアスクール（仮称）がそういった場になればと思っている。

- 作って終わりではなく、その後も継続的に続けていける環境をつくっていく必要がある。特に学校現場は教員の移動もあるため、教員が移動したらリセット…にならないような研修等をしていくことが求められる。
- オープンドアスクール（仮称）ができたとして、評価・評定をどのような扱いにしていくのか検討が必要。

→高校入試制度が変わるか、評定等がなくても入れる受け皿がなければ変わらないものになってしまうように感じる。

評定がないと入れない制度の見直しも必要。

社会でもそうだが、時代や環境に合わせて採用方法の見直し等も必要。

その人の強みがわかっていれば、それにあった入試方法を取り入れて、その力を伸ばしながら他の部分も学んでもらうということも有効であると思っている。

ただ、その一方で懸念しているのは、学生の頃に自由な席で学んだ人は、社会人になったときにも自由な席を会社に用意しなければいけないのかということは懸念している。未来につないでいきたいが、未来がまだ見えていないので、そういったことも想像しながら作っていければと思っている。

→今の良くないところは、改革しようとしても今までのシステムに乗らなければいけないという部分が変わらないため、結局どこかで今までのシステムに乗る過程を踏まなければいけなくなってしまうことだと思う。

小学校、中学校が改革されて、子どもにとっていい環境になっても、高校からサポートが薄くなり、これまでのシステムに則った学び方・入試制度を越えなければいけない。それを変えるには、上の人が動かなければいけないし、時間はかかると思うが、軽井沢町に変えられるところから変えるよう動いてほしいと思う。

- 先生は、子どもの学習権を保障することが仕事。

- 子どもが主語の学校は、先生が子どもを牛耳らない。

無理しないで行ける学校は、子どもが決めて、自分で行動できる学校だと思う。

しかし先生は、子どものために、「ここは我慢しろ」「ここはこういう形で頑張れ」という。これが邪魔。

- おおぞら小学校で保護者に伝えていたことは、各家庭では「保護者」かもしれないが、学校の門をくぐったら「サポーター」という意識を持ってほしいということ。地域の学校は校長のものではなく、地域の人で育てる学校。

サポーターにしてもらうのは、困っている子を助けること。

自分の子どもに関わるのは家でできること。自分の子どもを育てたければ、自分の子どもの周りの子どもを育てるという意識で、自分の子どもとは関わらないということを意識してもらった。周りの環境が育てば、子どもは勝手に育つ。

## ●グループG

### 1. クロストークの感想

- ・夢パークを見学したが、子どもたちは自由奔放に、自分のことは自分で決めてやっていた。先に大人が手を出すのではなく、子どもが本当にどうにかしてほしいといった時だけ大人が手助けするという仕組みになっていた。

学校では、5教科の勉強がすべてと捉えられていて、かけっこが早くても何の価値もないといわれてしまう。

学びの中身の順位を社会が決めていると思っている。

まずは、好き、楽しい、なぜを大切にしたい。

勉強に繋がる好きは認められるが、ゲームが好きというプログラミングを勧められるなど、勉強につながるように持っていられる。

- ・大人の在り方という話があったが、誰かに認められるために何かをするということではなく、自分はこれによって楽しく生きているんだという姿を周りの大人が見せて、誰かが評価してくれるからこれをするという動機付けじゃないところで子どもたちに動いてほしいと思う。

それは幼児教育から始まっていると思う。

幼児の頃は、ありのままを褒められる、認められるのに、小学生になると、求められものが変わり、誰のために、何のために生きていくのかということがわからなくなってしまうように感じる。子どもたちの葛藤になっているのではないか。

学校での同調圧力についても、アンケートに回答があったが、なぜみんな一緒にのことをしなければいけないのか疑問を抱いている。

戦後の教育から脱却して、今我々はどのように教育を見直すかということを考えられたらと思う。

- ・東京で保育士をしているときに、親子関係が煮詰まっていく姿、息苦しい姿をたくさん見てきた。子どもが大人の顔色をすごく見るな…と。

親子にとって、解放される場所が何なのかということを考えてきた。

それまでの経験をもとに、園舎のない森の幼稚園ぴっぴをつくった。

そこでの子どもの姿を見ていて感じたのは、本来子どもは、自分で考えて活動することができるのだということ。

今、自分が幼稚園で関わってきた子どもたちが高校、大学に上がり面白い生き方をしている。自分の人生を自分で作っている。

教育に正解はないと思って、目の前の子どもとその日の正解を作り出そうと考えてやってきた。では、自分の関わりや環境の何が彼らをそう育てたのかということを、今考えている。

- ・様々な研究で、2歳の1年間が人を信頼するうえで大事だといわれる人生の根っこを育てる部分。様々な教育施策等に、もっと幼児教育を絡めてほしいと思う。

- ・幼稚園に子どもスタッフという制度を設けており、学校がない日や不登校の児童生徒が保育を手伝っている。

幼稚園で関わっていた子どもが小学校で不登校になった。子どもスタッフとしてきた子どもに不登校になった理由を聞いたところ、「私には、ぴっぴが足りない」と言っていた。彼女は、ぴっぴに年長の1年間しか通っていなかった。

その言葉には彼女なりの意志があったと思うが、その後1年間ぴっぴでスタッフをしたのち、自分で「2年生になったら学校に行く」といい、2年生から学校へ楽しんで言っている。子どもたちには、きちっとした理由があるのだと学んだ。

- ・教室を飛び出してしまう子は、困る子と言われるが、主体的に自分で選んで行動している子だと思う。やりたいことがあったり、苦しさがあったりして、自分の意志でそこを離れるという選択を取っている。

可能性しかない子ばかりだと感じている。

息ができないという話があったが、本当にそれだけだと思う。

以前は登校拒否という言葉があり、それは自分で選んで学校へ行っていないというニュアンスを感じていたが、今は不登校という言葉が使われ、学校へ行くのが当たり前という前提にな

っている。

自分の下の子は、毎朝学校へ行くか行かないか自分で決めている。自分の中できちんとやることを決めて行動している。

上の子は、高校で学びのスタイルがあわず、勉強を全くしなかった。今は自分の好きな車の専門学校で楽しく学んでいる。好きを求める姿勢というのは、子どもにもともとあるものなのだろうと感じている。

その好きを求めていけるように大人がサポートすることが大切。

- ・子どもが不登校になったとき、その子のありのままを認めているつもりだったが、学校の求めるものを親としてやらせなければいけないという意識もあり、認めながらもやらせなければと感じていた。

今は、目の前の子がやりたいと思ったことについていくと決めていて、目の前の子に決めてほしいと思っている。

子どもの将来はその子が決めるものだし、大人がこう関わったからと言って、目の前の子の将来が約束されるわけではないので、目の前の子の気持ちを大事にしたいと思っている。

- ・最近環境の作り方が大切といわれる。環境の作り方を知りたいと思っている。

上の子がオープンドアの対象になっているが、今は好きに生きていて、「マインクラフト」をずっとやっている。

自分の好きなものを見つけられてよかったと思う一方、親としてはそればかりでいいのかという不安がある。

自分のことは自分で決めてほしいが、自分のことを決められるのかという気持ちもある。

下の子も学校へ行っていない。もともと好きなものがなかったが、野球にハマった。野球チームに入りたいという気持ちになったときに、御代田の「とげとげ言葉」を使わない指導をする野球チームに出会い、今野球をしている。

やっと社会との接点ができたと思っている。

2人の子どもは、まったく勉強をしていないので、好きを追求するのもいいが、現状の社会で生きていくためのスキルが身につけていないのではないかと心配もある。

今は学びの多様化学校ができるので、今の状態でもいいが、そこを卒業した後は違う。今の大学は教員にとっても生徒にとっても息苦しい環境で、ガチガチに占められている。

社会が、そういったスキルを、人を求めている。

小学校中学校が、そういった社会の求めているところとは真逆の方向に向かおうとしていると思うが、結局社会が変わらなければどこかで苦しい思いをすることになる。

ただ先々のことを考えると、難しさを感じる。

- ・今、大学でも「ともに」という考え方が強い。

みんなでやることが正義になっている。

ただ、そこは、個がいい人は個、みんなでやりたい人はみんなでやれるように選べる環境がいいと思う。

- ・小中高校大学、どこを見ても先生が息苦しさを感じている。

先生が息苦しい環境の中では、子どものことに余裕を持ってないと思う。

あと、失敗していいという環境も大事だと思う。

先生が失敗できない環境だと、子どもも失敗できない。

- ・自由に勉強させるといいのではないかなと思う。

クラスの中にできる子できない子いると思うが、それぞれの特徴や特性を生かす教育が大事だと思う。

地域や学校をつくるのが先なのか、子どもをつくるのが先なのかわからないが、子どもたちを大事にして、学校と親とが協力して子どもたちを育てていくことが大切。

- ・地域が先にできて、地域も一緒に学校をつくっていくということが必要である。

学校は地域を巻き込む必要がある。地域が学校を支えることが大切。

また、学校の先生は手出し口出しをしすぎているので、子どもがどんなものを好きで、どんなことを考えているのかをもっと感じるべき。

- ・最初に軽井沢オープンドアスクール話を聞いたときは、そんなに風呂敷を広げて大丈夫な

のか心配になった。

しかし、設置準備会議の委員を見ると、とても優れた方が集まっていると思った。

西郷先生の記事を読んだことがあるが、小学校を改革したとして、そのあとをどうするのかという思いがあったと。その先を考えながら校則をなくしたり、すべてが子ども目線でやってきた取り組みを見た。

本城委員は、もともと進学校をつくろうと思っていたが、生きる力を育てる学校をつくりたいと思いなおし、風越学園をつくったと。

風呂敷を広げて大丈夫かという懸念もあったが、これだけの委員の顔ぶれを見て少し安心している。

- ・娘がいるが、ドイツ人と結婚したためドイツで暮らしている。ドイツでの生活等の話を聞いていると、孫たちが日本の学校に通わなくてよかったと感じている。  
日本では転勤により先生が変わるが、ドイツは転勤が少なく、関りが深い。  
また、学校の自由度がだいぶ違う。校長先生が入学のときに、「あなたたちは我慢してはいけない。何かあればすぐに言いなさい」と子どもに言っていた。  
高学年になれば「生徒会」がなかったが、低学年でも生徒会を設置したいという相談を学校にすると、すぐに対応いただけた。  
大人の対応もそうだが、とても自由度が高いように感じる。

## 2. アンケートの意見より（LDの子どもたちへの配慮、対応と専門家配置について）

- ・下の子が、ひらがなも漢字もほとんど読めない。国語や算数がなんとなく認識できているレベル。  
結局、LDに対応できる専門家がいない。  
本人の学びたい気持ちはとても強いが、読めないことがハードルになって学校に行けなくなっている部分もあるのではないかと感じる。  
目が見えなければ点字があり、耳が聞こえなければ視覚的な方法がある。同じように、字が認識できない子への対応として、読み上げ機能を導入したり、LDの子どもを支援できるような専門家を配置していただきたい。
- ・デジタル教科書が導入され、ほぼすべての学校で実施されている、  
ただ、導入されただけで、授業中に一緒にやってくれない。  
支援級でも、タブレットが苦手という先生も多い。  
→コロナでだいぶ改善された。各学校で、パソコンやタブレットの導入が進んだ。
- ・読めない人に対する指導方法等を知っている先生が少なく、支援がない。  
→デジタル教材の使い方だけではなく、最低限のひらがなを認識できるようになる程度の教材や指導方法を現場の先生が持っていないので、学習ができない。  
→公教育は、あたりはずれの世界になっている。
- ・子どもへのサポートも、学校側がやっているものだと思っていても、中心でやってくれていた先生がいなくなるとそのサポートがなくなる。  
→オープンダスクールという箱ができたとしても、そこにどんな先生が、どんな環境で来てくれるのかで、その箱に魂が入るか入らないかが決まると思う。
- ・オープンダスクールができるとして、既存校でも改善できることを改善していくという動きがなければ、結局オープンダスクールを作ってもよくなるのではないのか。  
形だけやった風にならないように、そういった動きをできるように今から準備だけでもやる必要があると感じる。
- ・オープンダスクールは、支援級の子どもたちを選んで行かせるというような学校なのか。  
→選択肢の1つとして、そちらにも行けるというような位置づけ。

## ●グループH

### 1. 自己紹介と今回参加した動機等

- ・昨今、ニューロダイバーシティ（脳の多様性）ということが言われている。  
子どもたちを変えていくのではなく、子どもたちの特性等を個性として捉え、周りの環境を整えていくということが言われている。  
このオープンドアスクールも、そういった動きの大きなきっかけになるのではないかと感じている。  
子どもも多様になっているが、その多様に合わせられる肯定的な受け止めをできる学校になればいいなと思っている。
- ・自分の子どもも、みんなと一緒に学ぶということが難しく、小学校で特別支援学級にいた。そのころから感じていたが、今の子は「わからない」ことをわからないままにしている。  
小学校の剣道指導を行っているので、そこでは、わからないことを自分の意志で自分の言葉で伝えることの難しさと大切さを伝える指導をしている。
- ・今の子どもたちは生きづらさを感じているし、それを言えない環境だと感じる。
- ・子ども時代、昭和教育の中だったので、今でいうコンプライアンスに引っかかる指導をされてきたこともあった。  
そんな教育をやってはいけないという認識もあるが、厳しさと体罰は違うということを伝えていきたいと思っている。
- ・もともと人間は多様性が当たり前で、それをまとめるのが難しかったために、統一するために学校ができたと思っている。  
多様性や多文化を認められた環境の中で学ぶと、いじめがなかったり、気づくことができたり、共感して、協同することができるようになると感じている。
- ・ニューロダイバーシティの考え方は、子どもたちの中にも当たり前にあるものとなってきていて、この子はそういった考え方を適応する子、この子はそうじゃない子という捉え方ではなく、すべての子に当たり前に適応するもの、持っているものという感覚が大切である。
- ・子どもたちのために大人が行動するとき、その子どもが100年後まで幸せでいられることを根本として、行動してほしいと思う。
- ・自分自身が受けてきた教育と、今自分の子どもが受けている教育にあまり変化がない。それに驚きを隠せないでいる。  
古い体制を維持したいという考えもあるとは思いますが、不登校で学校に合わない子どもがこれだけ出ているという現状を考える必要がある。

### 2. クロストークの感想

- ・長野県の高校は、全入という活動・多様な受け入れ態勢ということは非常に活発にやっている。  
中学校は、子どもにとってとても居づらい場所だと思う。同じことを求められ、その中で比べられるという環境はとても苦しいのではないと思う。  
オープンドアスクールは、公設だが学校学校しない場所になってほしい。  
学校ではあるが、勉強をする場というよりは共にいる場となってほしい。  
→みんなに同じことをさせないことが必要。  
今の学校は、みんなで一緒に何かをするという部分が大きいですが、協同とはそういうことではないと思う。助け合いながら作り上げていくことが協同だと思う。
- ・子どもは、本当に成長する。本当に変わっていく。  
それは、大人が引っ張り上げるのではなく、子ども自身や周りの子どもの中で育って変わるので、子どもを信じてあげられる場所を作って欲しい。  
そういった精神が根付いたオープンドアスクールであってほしい。
- ・以前長野県は、教育のレベルが高いといわれていた。  
しかし、最近は軽井沢も、多様化ということで広くオープンになったことで様々な意見が入ってくるようになった。保護者がとても敏感になっている。

子どもより親の意見が大きくなってきていると感じている。

学校は、外部の人、部外者を入れることが難しい部分があるが、保護者は自分の家の子どもが何しているのか逐一気になる保護者もいる。学校サイドは頑張っている部分もあるが、そういった保護者が多くいるため、学校として発信したくてもできないことがあるように感じる。

→多様性ということで様々な子が集まっているため、教育が進んでいる・遅れているではなく、先生たちも何をしていいのかわからない状態にあるように見える。

- ・社会で生き抜く力が学校で着くと嬉しい。

10年20年後を見据えた教育が大切。

→ダメなものはダメ、いいものはいいといえる大人が少なくなっている。

- ・子ども信用することも必要なのではないか。

勉強も大事だが、勉強だけではなく、自分のやりたいこと・やるべきことを考えて行動することが大切であると思っている。

学校の取り組みとして、ただ学力をつけるのではなく、自分のやりたいことを考えられるようになる教育をしてくれると嬉しいとも思う。

- ・ミャンマーやネパールの学校は、様々な民族が住む中にある学校であり、政治も安定していない部分があるので、子どもたちが政治に巻き込まれ、正しいことが教えてもらえないことが多い。

日本のように給食が出て、掃除があつてというのはほとんどない。

人間力といわれているが、自分の考えをもって、その考えを述べることができる社会であることが、いい教育をするために必要であると思う。

→子どもが自分の意見を言えない理由として、めんどくさいことに巻き込まれたくないという答えがあつた。

自分の考えを言うと、それに対する理由等を求められたり、結局聞き入れてもらえなかったりするため、自分のことが言えず、結果的に暴力や騒ぐという行動で示すことが多い。

→まずは、大人が子どもに信用されることが1番必要なのではないかと思う。

- ・日本では、表現できるかどうかということの評価されることがあまりない。

アメリカ等では、学力があるか、先生の言うことをちゃんと聞いたかという指標だけではなく、自分の考えをきちんと言えたかどうかということが評価されている。

表現できたかどうかというところが評価されないの、自分の考えを言うトレーニングがされていない。必要性が高いと思う。

→フランスでは、そういった子どもを育てたくないの、保護者面談等で、勉強はできるが表現ができるとよりよいというような話をすることもある。

- ・評価という話が合ったが、グローバル社会になった以上、自分の考えを言わないで済む時代ではなくなったため、評価を見直してもらいたい。

→西野先生が高校入試の話をしていたが、評価の方法を変えると高校入試にも影響が出てしまうということが大きいのではないかと思う。

- ・仕事に就くことを考えると、今企業では個人の考え、話ができる人を必要としている企業と、マニュアル化されたことをきちんとできる人を求める企業とがあるため、どちらの力も身につく、評価される学校であることが必要なのではないかと思う。

- ・給食や掃除があるのは日本らしいことという話があつたが、掃除は自分たちでやったほうがよいように感じる。

→軽井沢中学では、文化祭の前にPTAが主体で窓の掃除等をする機会がある。

子どもが学ぶということもあるため、PTAのみではなく、保護者と子どもたちと一緒に実施することも検討している。

そういった、社会に出て使う、生きる上で使う知識を身に着けることも大切だし、そういう機会ができればと思う。